

乳全体から悩ましい快感がほとばしる。

寮長は指の腹で、さまざまに両乳首をこね回し続ける。

「どれだけえっちな躰なの、君……。誰に^{さわ}触られても、こんなふうにはくびく感じまくるってこと？」

「あああ…っ♡♡あ…っ♡ち、がいます……っ」

「違わないでしょ？何、この恥ずかしい敏感乳首。こんな敏感だったら、誰に^{さわ}触られても一緒でしょ」

「ひい…っ♡♡んっ♡ああ…♡ちがう…っ違います……っりょうちよう……寮長にだけ……っああっ♡♡♡っ」

乳首を緩急をつけてつつかれ、こねられていたかと思うと、突如、その一帯の乳房ごと、ぐにッと手のひらで揉みあげられた。

予想外の刺激に腰をしならせ、胸から下半身に、蜂蜜のような濃度の淫楽が^{つた}伝う。

「あああ…っ！♡♡♡」

拍子に震え続ける張り型を今まで以上にきつくしめつけてしまい、絶頂の予感に下半身が小刻みに痙攣したその時だった。

「君がまさか、こんなに手のかかる子だとはね」

そう言われながら、張りつめた幼茎に何やら黒革のものをかぶせられた。

それは革を格子状に組まれてできた装着具で、少年の竿にぴったりと合うサイズだった。竿の根元にあたる場所にあるベルトをきつめに絞られたあげく、カチヤン、と音をたてて金色の南京錠がそこにつけられる。

「これでしばらく、気持ちいいことはできないねえ」

「ひ…ああ……っ♡」

寮長の手早さにあっけにとられていた少年だったが、自分の現状を理解したとたん、尋常でない苦しさが竿と、その手前の下腹部を襲った。

「おいで。もっと本格的に指導してあげる」

寮長は張り型の振動を止めると少年の手の縄をほどき、震える細腰を軽々持ち上げて馬から降ろしてくれた。そして、震える下半身に何とか地面に立っ